電話一本で救援実現

AMDA活動報告

救える命があれば どこへでも

□15□

菅波 茂

ローカルイニシアチブ

AMDAインドネシア支部から若くて明るい二人の医師が、フィリピンのレイテ島へ派遣されていた。二月十七日朝、約二百五十人の小学生を含め一千人を超える死者・行方不明を出した豪雨・地滑りによる緊急救援活動に従事するためだ。

フィリピンとインドネシアは気候だけでなく、経済・社会的状況や疾病状況が似ている。被災者との良好な人間関係の下に医療支援を行ってくれた。彼らは昨年十月に発生したパキスタン北部地震緊急救援活動にも参加経験があった。

AMDAインドネシア支部長は、フスニ・A・タンラ教授。東インドネシアを受けもっているハサヌディン大学医学部麻酔科教授で、スラウェシ島のイスラム教共同体のリーダー、スルタンの家系だ。

オランダ植民地時代のインドネシア人医師はキリスト教徒だけだった。彼はインドネシア独立後のスラウェシ島で、初めてのイスラム教徒の医師だった。スカルノ大統領治世下のスルタンの没落で、まさに蛍雪時代を過ごした。

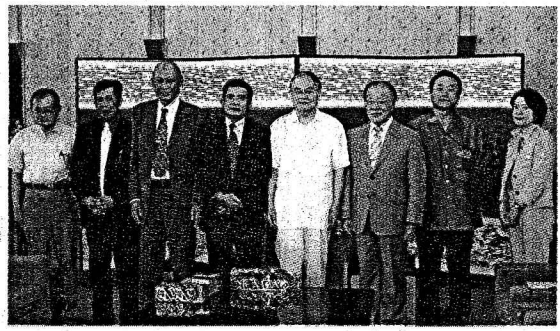
広島大学大学院麻酔科留学で医学博士号を修得した後、スラウェシ島の若いイスラム教徒に医師になる機会と、卒後の研修機会を与えることが彼の使命の一つである。

公正さとは、意欲と能力があれば機会を与えて自己実現させることである。彼の人生の後半は公正さの実現に費やされている。日本とインドネシアの交流推進の功績で、二〇〇四年度外務大臣表彰の栄誉に輝いている。東インドネシアで初めての受賞者である。

彼の行動力にあらためて感動したのは、イラン南東部地震緊急救援活動で、〇三年十二月に発生したイラン南東部大地震被災者救援活動の時だった。

彼に国際電話を入れた。「AMDA本部は医療チームを派遣することを決めた。インドネシア支部は派遣可能か」。二日後に返事がきた。「インドネシア支部はインドネシア赤十字社とともに、政府軍用機ヘラクレスでイランのバムに飛ぶ」

タンラ氏の行動力に感動



稲嶺恵一知事（右から4人目）を表敬したフスニ・A・タンラ教授（左から4人目）と、大仲良一AMDA沖縄支部長（右から3人目）ら
＝2005年6月27日、県庁

タンラ教授は私からの電話を受けた後、首都ジャカルタにいた保健大臣に電話で相談した。「AMDAインドネシア支部はイランに救援医療チームの派遣を決めた。インドネシア政府としてどう対処するのか」。結論は「インドネシア政府救援チームにAMDAインドネシア支部は参加してほしい」となった。

AMDAインドネシア支部医師三人を含め総勢六十人が三週間にわたってバムの郊外で被災者救援医療活動を実施した。彼の大胆な決断が実現したのは、タンラ教授と保健大臣、駐イラン大使が個人的に親しかったからである。保健大臣は前、駐イラン大使は元のハサヌディン大学長だったのも一因である。

昨年六月、タンラ教授は、インドネシア人医師二人とともに、沖縄を訪れ、稲嶺恵一知事を表敬した。インドネシアに甚大な被害をもたらしたスマトラ島沖地震・津波の緊急救援活動に対する沖縄県民の多大な支援に対し感謝を述べ、支援継続のお願いをするためだった。

また、AMDAインドネシア支部がある南スラウェシ州の知事から預かった沖縄県知事への親書を渡し、今後の友好推進に向けての有意義な訪問となった。

「救える命があればどこへでも」というAMDAのスローガンを実現してくれているのはローカルイニシアチブだ。ローカルイニシアチブとは、「現場の問題を一番良く知っている人が一番良い答えを持っている」である。人脈も最上級の良い答えの一つ。中南米に展開する沖縄県系移民のローカルイニシアチブとも連携したい。

AMDA（特定非営利活動法人アムダ）理事長

この連載は毎月第四日曜日に掲載します。